

第二次大戦の日本の行動(その3)

緒戦期の成果

01602334 松山大学 湊 晋平 MINITO Shimpei

まえがき

筆者は第1報で、1941年12月のハワイ海戦から1942年5月の珊瑚海海戦までを緒戦期として区分した。

この期間、日本はハワイ強襲(128/1941)をもって開戦し、同時にマレー半島の敵前上陸に成功し(128)、マレー沖海戦(1210)で英艦隊を激減、香港占領(1225)、比島マニラ入城(121942)、シンガポールの攻略(215)に成功した。さらに続いて蘭印の攻略(310)、ベンガル湾方面での英艦隊撃沈(45, 49)等、東西に戦域を拡大した。

しかしマリアナのポートモレスビーを攻略しようとして珊瑚海海戦(57, 58)を生起し、戦術的な勝利を得たが、戦略目的を達成することに失敗した。

緒戦期においては第一線将兵の健闘により、期待以上の大勝を得たが、これが戦争指導者の油断を招き、その後の失敗へと繋がっていく。

1. ハワイ強襲(128/1941)

日本海軍は、開戦初頭ハワイ真珠湾に在泊中の米太平洋艦隊艦隊の主力を撃破した。日米国民にとっても衝撃的な出来事であり、その効果は表のごとく整理できる。この成功の原因として

- ① 日本機動艦隊の航空部隊の実力が、極めて高く優れていたこと
- ② 米国が、日本海軍の能力を低く評価し、油断していたこと
- ③ 日本海軍が作戦準備を周到に行うとともに機密保持に努力したこと

などがあげられる。それにしても最後通告の際の日本外務省の外交手続きの不手際は、大きな失態でありその責任は追及されなければならない。

2. マレー方面作戦

山下奉文將軍の25軍がマレー半島に上陸し、より強力な兵力を持つ英軍を撃破してシンガポールに快進撃したこと、および海軍の基地航空部隊が、洋上はるかに英艦隊を撃沈したことは高く評価されている。この成功の原因として

- ① 強力な基地部隊(海軍)による制空権、制海権の獲得
- ② 陸軍航空の対地支援

③ 第一線日本軍将兵の創意工夫、学習能力があり、この結果

④ 予想を上回るスピードで英の防衛戦線の突破を成功したのは現在のビジネスプロセスのアジリティの成果と通ずるものがある。(小池)

3. 比島攻略作戦

本間雅晴將軍の14軍のマニラ攻略は予想以上の早さで達成した。この成功は

- ① 海軍基地航空部隊による比島米航空部隊の早期撃滅に成功したこと
- ② 米軍のパターン半島への後退によるマニラ放棄。比島攻略の作戦は当初に充分分析される必要があった。

4. 蘭印・印度洋方面進攻

今村均將軍の16軍はセレベス島上陸(1.12)を当初に、ボルネオ島(210)、スマトラ島(3.4)、ジャバ島(3.9)を攻略した。これも予想以上の成果とスピードであった。この原因として

- ① 制空権、制海権の早期獲得
- ② 陸軍部隊の卓越した士気と戦闘能力
- ③ 蘭印軍の萎縮した士気
- ④ 現地住民の日本軍への協力があげられる。

海軍の機動艦隊が印度洋方面に行動し(3.9~4.9)、英東洋艦隊を撃沈したが、この作戦をさらに強力に展開し、独の北阿作戦を支援することは戦略的に重要であり、この好機を見送った日本の戦略指導の稚拙さが露呈している。

5. 珊瑚海海戦(57, 58)

日本軍は開戦以来、幸運に恵まれ破竹の進撃を続け、戦域を拡大してきたが、やがて米軍も当初の打撃から立ち直り、この時期から互角の戦となって来た。日本軍も当初以来の勢いも失い、注意力不足や油断から錯誤を犯すようになる。珊瑚海海戦では戦術的には勝利を得たが、追撃による戦果拡大を失し、またポートモレスビー攻略の戦略目的を達成できなかった。珊瑚海海戦が成功しなかった原因として

- ① 日本の攻勢限界域付近で十分な制空権、制海権が得られないところで無理な作戦を行った。

- ② 緒戦の大勝を過信して連合国の戦力を過少に見積もっていた。
- ③ 作戦遂行に周到な計画や準備が欠けていた。
- ④ 指揮官の闘志不足と指揮の不手際、索敵の不手際と不運等があげられる。

まとめ

- ① 真珠湾の奇襲成功に代表される日本軍の赫々たる戦果と、怒濤の進撃は日本国民を戦争の前途に楽観と油断をもたらした。
- ② また、東亜の原住民にとって絶対的であった白人支配の凋落を知らしめ、戦後の植民地独立のきっかけとなった。
- ③ しかし、連合国側は、日本の戦力に対する今迄の過少評価の認識を改め、特に米国はその巨大な工業力を動員して戦争参入に務めるようになった。

・緒戦期の大勝の原因

- ① 日本海軍の真珠湾攻撃成功と、その後の活躍により東亜海域における制海権早期獲得が緒戦の作戦を成功させた最大の原因

- ② 少数精鋭の航空部隊搭乗員のすぐれた術力が制空権の確保に貢献し、戦局の進展に大きく寄与した。
- ③ 植民地防衛にたつ連合国地上兵力に対し、日本軍が海軍に兵力を集中し、優勢を発揮できた。
- ④ 第一線で戦った日本軍将兵の創意工夫と学習能力の高さがよき成果につながった。
- ⑤ 予想を得えるスピードでの攻勢とその成功が士気昂揚を持たらし、戦果を拡大した。

参 考 文 献

- 1) 高木惣吉,「太平洋海戦史(改訂版)」,岩波新書,(1959)
- 2) 林 三郎,「太平洋戦争陸戦概史」,岩波新書,(1951)
- 3) 奥宮正武,「太平洋戦史の読み方」,東洋経済新報社,(1993)
- 4) 伊藤正徳,「帝国陸軍の最後・進攻篇」,文芸春秋新社,(1959)
- 5) 外山三郎,「区説太平洋海戦史1」,光人社,(1995) 他

真珠湾奇襲攻撃の成果

	日本	米国
メリット	1、東南アジア進攻における米太平洋艦隊の妨害を排除。 2、東南アジア進攻に全面的支援とゆとりを与える。 3、対米戦争の前途に対して明るさと希望をもたらした。	1、対日戦争に対して国内団結 2、空母艦隊が損害を免れる。 3、旧式戦艦隊を喪失したが、引き揚げや修理可能で後再使用。 4、戦艦熟練乗組員の他の艦船への転用を図る。 5、補給支援設備が損害を免れる。
デメリット	1、外交連絡の遅れが”だまし討ち”の汚名を被る。 2、対米戦争の前途に対して油断を生じたこと。 3、米空母艦隊を見逃したこと 4、補給支援設備等の攻撃不徹底	1、レインボー作戦の実行不可能になる。 2、米領土の比島、グアム、ウエークを喪失して守勢にたつ。 3、英・蘭植民地の失陥を招き反攻時期遅れる。